

世界

1946年1月1日創刊
2021年2月1日発行（毎月1回1日発行）

2021 February
no.941

創刊75年

SEKAI 岩波書店

2

世界

SEKAI

2021

創刊75年

特集

大絶滅の時代

世界 第九四二号 二〇二一年二月

一九四六年一月一日創刊
二〇二一年二月一日発行（毎月一回一日発行）

© 岩波書店 2021年 本誌掲載記事の無断転載をお断りします。

編集・発行者 熊谷伸一郎 印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 (株) 岩波書店 本誌編集部電話 03 (5210) 4141 FAX 03 (5210) 4144

特集1 大絶滅の時代

五箇公一 三宅芳夫 道家哲平 G・スタインメッツ A・レブキン



特集2 阿波根 昌鴻——態度としての非戦

謝花悦子 張ヶ谷弘司 新城郁夫 鳥山 淳 榎本 空

〈座談会〉言語を守る闘い 富川力道 田澤 耕 ワッカス・チョーラク 金井真紀

私たちは追及する——首相の犯罪に裁きを 泉澤 章

科学者コミュニティと科学的助言 広渡清吾

国会論議を侮ってはいけない 上西充子×荻上チキ

馬毛島を、知っていますか 八板俊輔

阿波根昌鴻 態度としての非戦 謝花悦子ほか
私たちは追及する 泉澤 章
馬毛島を、知っていますか 八板俊輔

2

定価（本体八五〇円＋税）



HMAEN
TOKYO

hmaen.com

雑誌 05501-02
ISSN 0582-4532
Printed in Japan



4910055010212
00850

グローバル都市をあるく

ソウルの夢

連載……最終回 龍山・梨泰院
——ポスト・アメリカの時代

キム・ソンミン 一九七六年韓国・ソウル生まれ。北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究所准教授。著書に『K-POP 新感覚のメディア』（岩波新書）など。



中央の木々が生い茂った一帯が米軍基地。その右側が龍山駅周辺、左側が梨泰院（筆者撮影） 世界 SEKAI 2021.2

った。軍人のイメージを払拭しなかった盧泰愚としては、他のどの候補よりも積極的にその欲望に応える必要があったのだ。

その欲望は、当時さまざまな場面から直接肌で感じられるものだった。たとえば、一九八八年ソウルオリンピックで米国とソ連が対戦すると、韓国の観衆はソ連チームを熱烈に応援した。いうまでもなくそこで働いていたのは、現場にいたまだ中学一年生の私でも感じられるほどの、「新しい世界」への強い思いにほかならなかった。

じつさい盧泰愚政権のあいだ、世界との関係は急速に変わった。一九九一年には韓国と北朝鮮が国連に同時加入し、「南北基本合意書」を交わした。ロシア（一九九〇年）、中国（一九九二年）と国交を結んだのもこの時期だ。龍山基地移転に関しても一九九〇年に韓米基本合意書が締結された。

そして、盧武鉉政権の二〇〇四年、ようやくその具体案の妥結が行われた。実施まではさらに十数年の時間がかかった。二〇一七〜一八年に駐韓米軍司令部と米八軍司令部が首都圏の外側にある平沢基地に移転した。二〇一九年には返還手続きが開始し、二〇二〇年五月にようやく返還工事がはじまった。

その三〇年間、ソウルは「アメリカ」から離れ、「アメリカ」に近づいた。前者が暴力をも含む絶対的な「家父

アメリカという中心

ソウルがメガシティからグローバルシティへと転換しはじめたのは、一九八八年前後。一九六〇年代からはじまった江南開発で、それまで漢江の北側に位置していた都心が南側へと拡張し、現在のソウルのかたちがほぼ完成した頃だった。ソウルと東京が姉妹友好都市を結んだのも一九八八年。この年にアジア開発銀行（ADB）は、ソウルが二〇〇〇年までに世界の二五大都市の一つになると予測した。

ソウルの空間的拡張は、量的・質的成長だけを意味するものではなかった。それまで韓国社会が意識的・無意識的に覆い隠していた権力構造が、否認しようがないスペクタクルとして地図上に現れた。龍山の米軍基地が、まるで東京の皇居のように、ソウルの地理的中心部に位置するようになったのだ。

一九八七年一二月、全斗煥の部下で「肅軍クーデター」（一九七九年二月二日）の主役だった盧泰愚が、野党の分裂で制した初の直接大統領選で「米軍基地移転」を公約として掲げたのは必然なことだった。民主化をつうじて人びとが求めていたのは、植民地時代から軍事独裁時代までつづいた根本的な権力構造を変えることであり、そのひとつは、その核心だった「アメリカ」から脱却することだ

長」としてのアメリカだったならば、後者はニューヨークやロサンゼルスなどのグローバル都市と共有する「現代性」としてのアメリカである。

ソウルの真中心にあった米軍基地の移転が意味するのは、単純なアメリカの不在ではない。「ポスト」という接頭辞が「アフター」と「ビヨンド」との両方の意味をもつことを考えれば、いまソウルが迎えているのは、まさに両方の意味をもつ「ポスト・アメリカ」の時代なのである。ソウルは、「中心」を自分の手で築いていかねばならないのだ。

禁止の地から開放の地へ

もともと龍山は、首都の関門でありながら、山（南山）と川（漢江）のあいだに位置するその地理的な条件から、数百年間外国軍隊との複雑な歴史をもつ地域である。基地の歴史がはじまったのは、一九〇四年、日露戦争勃発とともに日本軍が駐屯してからだ。龍山駅が建てられた一九〇六年から基地の建設がはじまり、一九〇八年には日本軍とその家族の居住が本格化した。韓国併合の年が一九一〇年、京城駅の完成が一九二五年であることを考えれば、植民地時代における龍山の位置づけを想像することができるだろう。そして朝鮮総督府が降伏した一九四五年九月九日から、米軍基地としての龍山の歴史がはじまった。



米軍基地の塙(右)と龍山区役所(左)。その右側に梨泰院の入り口がある

約一〇五万坪にのぼる米軍基地のうち約九〇万坪には、「治癒」と「未来」をテーマにした巨大な生態公園が造成されることになるという。二〇二〇年七月に公園の部分開放がはじまり、造成計画案について市民の意見を聞く公募も開始された(韓国国土交通部)。しかし、その完成まではまた相当な時間がかかるだろう。

そもそも米軍の移転が自動的に基地の返還を意味するわけではない。完全なる「返還」をめぐる協議は今後もつづくことになるし、一〇〇億円以上がかかると推測される環境汚染の浄化費用など、返還の手続きをめぐる課題も山積している。

三角地駅(地下鉄四号線・六号線)の一三番出口を出て一九九四年に建てられた戦争記念館の方向へと進めば、米軍基地北側の「メインポスト」と南側の「サウスポスト」のあいだを通る道(梨泰院路)を歩くことができる。この道に沿って南にある龍山公園の入り口になる西米庫駅(京義/中央線)まで時計回りに歩いてみると、灰色の壁のうえに刺さっている鉄のフェンス(鉄柵)が、この道の閑寂さとは似

惨事」が起きたのもここだった。

基地の東西側に広がるこのような風景は、龍山公園が計画通り完成されるまでの長い道のりを予感させる。たんなるニューヨーク・セントラルパークの模倣になるのか、文化と歴史、生態を媒介にした治癒の空間になるのか。

梨泰院の境界

七五年間韓国人の出入りが禁止されていた龍山基地が、一九九六年まで地上波テレビチャンネルでみられた米軍放送(AFKN)の記憶とともにアメリカのヘゲモニーを想像させる空間だったとするならば、基地の東側にある梨泰院は、モノとコト、人としてのアメリカに直接触れることで、自己と世界との距離を想像する空間だった。

梨泰院は朝鮮時代からの地名であるが、現在の盛り場としての「梨泰院」といえば、梨泰院駅前にある「ハミルトンホテル」を中心に広がる龍山区の五つの洞(梨泰院一〜二洞、漢南洞、普光洞、龍山二街洞)のなかで、「梨泰院的な」場所性を共有する地域を指す。六〇年代から米軍のためのサービス・商品を提供する産業を中心に形成された消費空間が、八〇年代からは外国観光客をターゲットにした観光空間と化した。一九九七年には、明洞よりもはやくソウルの観光特区第一号に指定された。

合わない緊張感を感じさせる。この道は米軍基地ではない。そう考えると、アメリカの領土だったのは基地の内側だけではなかったことに改めて気づく。首都の中心の出入りが禁止されているという感覚は、基地を回避してつくられた道路のかたちのように、人びとの感情と感覚のなかに刻まれているのだ。

その反対側、つまり米軍基地の西側にある龍山駅(京釜線・京元線など)・新龍山駅(地下鉄四号線)から南側の二村(国立中央博物館)駅(地下鉄四号線・京義/中央線)まで歩くと、東とは異なる風景が現れる。マンハッタンの摩天楼を連想させるデザインと威圧感を持った高層ビルが次々と立ち並び、米軍基地移転が巻き起こした開発の熱気とここに集まる資本の勢いを感じさせるのだ。

じっさい基地の南側にあたる漢江沿いの高層アパートの価格は、すでに一坪あたり一〇〇〇万円を超えているという。ちょうど漢江の南側にある狎鷗亭洞のアパートが七〇年代にはじまったいわば「江南神話」の震源地だったことを考えれば、ここが「準江南」と呼ばれている理由がよくわかる(連載第一回参照)。

二〇〇九年、「ニュータウン」開発による撤去に反対する闘争を鎮圧する過程で立ち退き住民五人と警察一人が死亡するなど、大きな社会的トラウマを残したいわば「龍山

梨泰院をカバーする三つの地下鉄駅(六号線緑莎坪駅・梨泰院駅・漢江鎮駅)がすべて二〇〇一年に開通したことでわかるように、ソウルの人びとにとって梨泰院は、地理的にも心理的にもアクセスがそう容易な場所ではなかった。「米軍専用」のクラブなどの場所はもちろん、韓米間の不平等な関係に基づき米軍に与えられていた様々な法制度的特権が、米軍基地の外側にもかかわらず、国境を越境するような感情を覚えさせた。

そのような境界意識は、一方では海外旅行やインターネット普及が本格化するまで、「本物のアメリカ」への欲望とつながって作用した。古くからは米軍部隊やPX物資が流れるブラックマーケットからの影響が、八〇年代からは国際化の流れがそこにはあった。そのすがたを日本では「ヤングのブレイクゾーンで、東京でいうと六本木」(朝日新聞)一九八八年七月一六日)と紹介していたが、まさに東京でも経験した「アメリカ的なもの」をめぐるおいとリズムが、この街にはあった。K-POPのシステムが江南を中心に築かれるまで、「韓国歌謡」からK-POPへの転換を導いた多くのミュージシャンたちも、梨泰院を通じてアメリカ的なサウンドと感覚を身につけている。

もう一つの梨泰院らしさ

梨泰院がドラマ『梨泰院クラス』で描かれているような現在の盛り場になったのは、二〇一〇年に入ってからだ。一方には二〇〇四年にできた「サムスン美術館リウム」をはじめ、二〇〇〇年代から増えたアート空間を中心とした洗練された消費空間の浮上も、もう一方には江南や弘大など経てつづくジェントリフィケーションのなかで、二〇一三〇代の文化生産・消費者たちが「古き梨泰院」をヒップで個性的な場所として新たに「発見」する過程があった。

二〇一〇年代における梨泰院ブームは、「タルトソネ」(月に近い村という意味)ともいわれる貧民街の象徴だった「解放村」、韓国陸軍中央経理団があった「経理団通り」など、梨泰院の街々で広がった。米軍基地の周辺でありながら南山に近い地理的条件で開発が遅れていたのが、むしろ「レトロキ」から流行をみつけ出す二〇一〇年代のSNS文化とマッチしたのである。

しかし何より人びとを引きつけたのは、ソウルの他の場所では経験できない文化的多様性である。たとえば、梨泰院駅三番出口から出れば、韓国初のモスク「ソウル中央聖院」をはじめ、多様な宗教と人種、民族の生活文化空間に出会うことができる。LGBTフレンドリーな繁華街も梨泰院で

世界への距離

「ポスト・アメリカ」の過程を経験している龍山・梨泰院の変容は、当然「中心が空く」はじめての時代を迎えようとしているソウル全体の未来と深く関わっている。新しい中心のあり方をめぐる様々な動きには、ソウルの、そして韓国社会の政治・経済・社会・文化的欲望が集約されているからだ。

この連載で扱ってきた二〇三〇年間の変化は、途上国のメガシティだったこの都市が様々な転機を経ながら、先進国のグローバル都市としての機能を担うようにまで成長した過程だった。じつさいそれは様々な都市指標からも表れる。たとえば森記念財団都市戦略研究所による都市競争力の評価によれば、ソウルの総合順位は八位。とくに高い評価を受けているのは、研究・開発、文化・交流、交通・アクセスだった(『世界の都市総合力ランキング2020』)。

新自由主義体制のもとで変わりつづければならなかった切実さと、先進国入りへの強い欲望が交錯するなか、「革新」が都市のアイデンティティそのものになったソウルの性格は、当然韓国という国の構造にも直接的に影響している。国連の専門機関「世界的所有権機関(WIPO)」が発行する「グローバル・イノベーション・インデックス」



梨泰院。中央はモスク

指向のアイデンティティが築いていたもう一つの「梨泰院らしさ」が浮上し、人びとを引きつけるようになったのだ。そういう意味でも『梨泰院クラス』の人氣が梨泰院にもたらしている変化は興味深い。ドラマのなかでは、人びとの様々な文化的アイデンティティが集まった主人公の「ポチャ」(屋台から広がったカジュアルな居酒屋)が資本を背負った大手飲食店と戦っているが、ドラマのそとでは既存の多国籍飲食店が、ドラマの人氣が火をつけた「ポチャ」ブームと必死に戦っているからだ。

Z世代を通じて発信された『梨泰院クラス』が、世界中の人びとをソウルに呼び寄せ、梨泰院の場所性を変える。梨泰院でみえてくるのは、ソウルから世界への欲望と、世界からソウルへの欲望が同時に生み出す可能性と危機である。

(GI、技術革新力指数)は、二〇二〇年における韓国の革新指数を世界一〇位と評価した。興味深いのは、人的資源及び研究(二位)と制度(二九位)とのギャップ。創造階級に依存しているこの都市の特徴が顕著に表れている結果である(WIPO『GI 2020』)。

しかし、不動産価格の過剰な上昇や格差、集団間の葛藤など、グローバル化を進めるなかで抱えてしまった問題は依然この都市の課題として残っている。それは人びとの認識やまなざしからもみられる。Kカルチャーがグローバルに消費されるようになったいまでも、ソウル発の報道からアメリカの視点に依存しない独自の観点と分析をみつけることはなかなか難しい。

そういう意味でもいま迎えている「ポスト・アメリカ」の時代は、これまでとは異なる意味で「世界に近づく」時間になるだろう。「開発」の誘惑にうちかかって「都市の中心」を生態公園に仕上げられるのか。梨泰院で生まれた文化的多様性を、都市のものとして制度的かつ社会的に受け入れられるのか。ソウルをグローバル都市に導いた「K的なもの」をより開放的に拡張させながらも、個人個人の「幸福」と関わるような課題を果たしていくことこそ、この都市に求められているもっとも切実な「革新」なのかもしれない。